



ライフラインの最前線で地域に開く

1.17。1995年の阪神・淡路大震災から25年が経ったが、あれ以来、自然災害は激甚化の様相を呈している。地域のライフラインを守り続ける関西電力送配電カンパニー兵庫支社で、地域コミュニケーションを担うメンバーの姿を追った。

震災を風化させない

2020年1月17日早朝の神戸・東遊園地。地面に並べられた竹灯籠への灯火が行われ、南に隣接する神戸関電ビルの壁面に「1・17」の文字が浮かび上がる。震災から25年を迎えた「阪神・淡路大震災1・17のつどい」が静かに幕を開けた。この日に合わせ関電ビル1階では「1・17の記憶―電力復旧への道のり―」と題する写真展示を実施。企画したのは兵庫支社神戸総務部コミュニケーション統括グループの浅葉佐和子だ。

浅葉は阪神・淡路大震災後に入社した。きっかけは「あの日、暗闇の中で夜が明けるのを待ち、灯りが点いた時に電気のありがたさを感じた」こと。営業所のお客さまセンターで接客や電気工事受付などを務めた後、兵庫支社の広報担当になった。今回の写真展示では、震災を風化させないという強い想いを込め、被災状況やライフラインの復旧にあたる社員たちの姿を捉えた写真を展示した。

「自分たちの想いをどう伝えるか、チームメンバーと1点1点念入りに写真を選びました。写真展に訪れた人から、『震災の教訓の継承に役立つ』『防災の必要性を痛感した』という言葉をいただき、

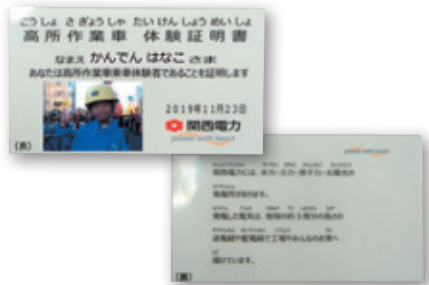
した出前教室を神戸・阪神配電営業所が主体となり、支社を挙げて年間約50回以上実施している。

子供たちにわかりやすく

自治体や地域が主催する職場体験や、防災・減災啓発活動の実施など支社全体の計画や各所との調整をするのが浅葉の役割だ。

兵庫県が実施する「トライやる・ウィーク」は中学生に働く場を見せて学んでもらうもの。神戸エリアの配電営業所や電力所で、高所作業車の乗車体験や電線接続体験などを行っている。

19年11月には明石青年会議所が主催するまちおこしの祭典「B1グランプリ」に神戸電力本部の関係箇所が協力して参加。防災・減災意識の向上をめざす「はたらく車」コーナーで、停電時に病院などの電源を確保する高圧発電機車と、高所作業車を展示。100人以上の子供たちが高所作業



B1グランプリでの高所作業車体験



地域の集まりに向いて会社のPRを行う久家



浅葉が技術者と一緒に出向いた、舞子高校への出前授業

神戸総務部の浅葉



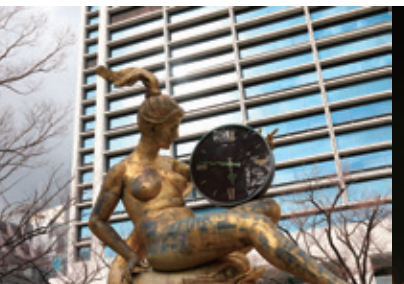
阪神配電営業所の久家

震災復興を願って95年12月に始まった神戸ルミナリエ。点灯前、会場の清掃活動を行う兵庫支社メンバー



兵庫支社1階で行われた写真展「1.17の記憶―電力復旧への道のり―」

震災時刻午前5時46分を指したまま止まった時計（東遊園地）



1.17。竹灯籠への灯火とともに、南隣の神戸関電ビルでもライトアップ

伝え続ける重要性を改めて考えました」

防災を伝える出前教室

震災を経験した地域には防災教育が根づいている。02年4月、兵庫県立舞子高校に全国初の環境防災学科が設置された。震災を教訓に、次代を担う高校生に防災教育を行うのが目的だ。

神戸電力本部統括グループと神戸配電営業所はこの学校で年2回実施する出前教室を担当し、授業に向かう。5月は環境防災学科の新入生を前に、阪神・淡路大震災の被害状況と復旧、防災対策について語った。1月は1・17震災メモリアル行事の一環として、防災対策の出前教室と実演イベントの2本立てで行った。家庭での電気の安全ポイント、感震ブレーカー操作などの説明は技術担当者が実施。終了後、「技術的なことは知らなかったのですが、勉強になりました」と生徒が感想を伝えるにきてくれた。いつもは広報担当者のみで出向く出前教室だが、技術者が加わることで、生徒たちの興味の幅がより広がることを実感した。

身近な防災対策に加え、詳しくは知られていない発電所から家庭までの「電気の道」の話なども出前教室で説明している。兵庫支社では、小学生親子を対象に

車に乗り、乗車体験証明書をもらって大喜びだったという。

「子供たちにライフラインとしての電気事業をいかにわかりやすく説明するか。図や模型を使ったり、例えを用いて興味を持って聞いてもらう工夫が欠かせません」

災害渦中の出番

広報メンバーは、台風や大雨による停電等の被害が出た際には自治体と一体になって対応を行う。

18年9月に襲来した台風21号は阪神南部地域に大きな被害をもたらした。尼崎市では1週間も停電が続いたが、関西電力のコールセンターが電話の集中によりつながらず、市役所には市民からの問い合わせが殺到。その渦中に連絡支援要員として派遣されたのが、兵庫支社阪神配電営業所コミュニケーション係の久家大輔。尼崎市役所危機管理局と関西電力の情報連携に奔走した。

「昼夜を問わず対応に当たっている市職員の方や停電で不安な思いをされているお客さまに対し、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。自分がその場所にいる意味を考えて、その時できることに全力で取り組みました」

復旧が長引き2度目の派遣が決まった時は、「正直なところ、今日も厳しい対応が待っているのか」と憂鬱になったという。しかし市職員の方から「今日も来てくれてありがとう」と思いがけず声をかけられ、沈んだ気分は一瞬にして喜びに変わった。「私の対応をご理解いただいた。気持ちを通じた」。地域対応に携わる久家にとって得難い体験となった。

人々の気持ちに寄り添い信頼回復

台風21号以降、自治体からの防災訓練参加要請や防災会議での説明要請が増えてきた。久家が担当するエリアは、尼崎市、西宮市、芦屋市、伊丹市、宝塚市を含む阪神南部地域。

防災訓練では、近年の災害で注目を集めたポータブル発電機を稼働させ、スマートフォンへの充電を行った。参加者から多くの質問があり、関心の高さが窺えた。「発電機を実際にご覧いただくと、排煙・騒音が発生することや、燃料補給の継続が必要なこと、出力が小さいといった留意点もご理解いただきやすい」

一方で、訓練に参加していると、台風21号で起きた長時間停電に対するお叱りの声を受けることもある。関西電力は台風21号をきっかけに停電や復旧進捗を

「電気とエネルギー」をテーマにした出前教室で講師を務める久家



地域イベントでは手回し発電の釣り竿で魚釣り

尼崎市長にポータブル発電機の実演説明を実施

伝える「停電情報アプリ」を開発した。「当時は情報が少なく、いつ電気が点くかわからない不安が大きかったのだと思います。まずはお客さまの気持ちを受け止めた上で、停電情報アプリの周知などお伝えすべきことをお話しする。この繰り返し、積み重ねが信頼回復の第一歩。そう考えて粘り強く取り組んでいます」

「地域への窓口・顔」として

地域に密着した事業を展開する関西電力送配電カンパニー。この4月には関西電力から分社化して関西電力送配電株式会社となる。関西電力グループの「地域の顔」としての役割もさらに増すだろう。

しかし久家の姿勢は変わらない。「お客さまから信頼され、相談してみようと思っただけの存在になることが、この仕事の醍醐味。社外の方と接する機会も増えると予想しており、関西電力グループの地域への窓口＝顔としてしっかり役割を果たしていきます」

一方、浅葉は新会社のPRに夢を馳せる。「私たちの会社がどのような業務を担っているかを知っていただくことが大切。広報担当として地域のお客さまと密接に関わり、ファンになってもらえるような情報発信をめざします」

躍

編集後記

2020年4月1日発送電分離。関西電力も送配電事業を分社化し、「関西電力送配電」が事業を承継。大阪市の本店、関西2府4県この6支社、東海と北陸の電力本部など、総勢約9,000人の社員という陣容で新たなスタートを切るなか、今号のテーマは「社会インフラとライフライン」です。

横山明彦さん、村木美貴さん、筒井慎介さんにお集まりいただいた「鼎談」では、ライフラインを守るための課題や今後の方向性について議論いただき、続く「オピニオン」では、「使命」「レジリエンス」「ビジョン」というライフラインをめぐる側面について識者・専門家に提言をいただきました。

ライフラインの担い手である送配電事業者への提言を受け、[かんでんFocus]では、新会社の責任者に、事業に懸ける想いを訊くとともに、[現場力ノ最前線]では、阪神・淡路大震災から25年が経つ兵庫支社で地域コミュニケーションに携わる社員の姿を追いました。

また[旬発NIPPON]では、平城遷都1300年祭に端を発し2020年にフィナーレを迎える奈良県の「記紀・万葉プロジェクト」を取り上げました。

『石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりけるかも』(万葉集1418 志貴皇子)——新しい春、新たな未来に挑む新生・関西電力としての決意を新たに、新しい『躍』をお届けします。(T)

躍

『躍』(やく)という誌名は、皆さまとともに「躍進」「飛躍」していきたい、また皆さまにとって「心躍る」広報誌でありたい、との思いを込めて名づけました。

『躍』の内容はホームページでもご覧いただけます。
<https://www.kepco.co.jp/yaku/>

発行●関西電力株式会社 広報室
発行人／池田雅章 編集人／奥戸義昌
〒530-8270 大阪市北区中之島3丁目6番16号 電話06-7501-0240
企画／編集●株式会社エム・シー・アンド・ビー

